季報

二松学舎大学附属図書館
quarterly report

目次

P2　人類の未来と日本漢詩　加藤国安

P3　随想　キリマンジャロの雪　髙橋美智子

P4　心に届ける支援物資　張佩茹

P5　教えて、漱石先生　「柏の図書を借りたいの巻」

P6～7　ラーニング・コモンズ開室

P8　図書館だより／大学資料展示室より

No.92
2015（平成27）年
7月

人類の未来と日本漢詩

東アジア学術総合研究所　特命教授　加藤　国安

我々人類は、2万5千年前は300万人程度にすぎなかった。それが今や50億人の超過密状態だ。それゆえの問題が次から次と襲ってくる。だが、今更自然に帰れなどという気休めを言えるわけもない。原始の世、我々の祖先がどれほど自然に強い恐怖を感じていたことか。1986年、四川の三星堆から出土した青銅の大仮面は恐ろしい形相をしている。牛のような大きな耳、横に裂けた口、高い鼻、飛び出した眼。それは聴力・味覚・嗅覚・視力の超能力への願望そのものだ。自然は恵みだけでなく甚大な被害ももたらした。あの恐ろしい形相は、それだけ原始の世が危険や恐怖と隣り合わせだったことを物語る。

しかし我々は気力をふりしぼって原野に立ち向かい、農業や牧畜文化を誕生させ、やがて都市文化を形成するまでになった。けれども我々の作り上げた社会は、つねに光と影が激しく交錯し合うものだった。その歴史を総括して、ようやく高い精神文化が獲得されたのである。このようにして我々の心に、万物の中でもっとも知恵・知略にすぐれる者との認識が根を下ろした。「惟(こ)れ天地は万物の父母、惟れ人は万物の霊」(『尚書』泰誓上)。恐怖を克服したという人類のなんと誇らしい賛歌であることか。

この自尊心はその後ますます膨らみ、ことあるごとに表明されてきた。司馬光(しばこう)いわく、「天は万物を生じ、各おの食(は)む所有り。苟(いや)しくも其の食む所を得ざれば、則ち其の生を全(まっと)うする能(あた)はず。人は万物の霊と為りて、蔬穀(そこく)酒肉を兼ねて之を食らふ、乃ち其れ常の性なり」(「李大卿孝基に答ふる書」)。日本の林鵞峰(はやしがほう)（1618〜1680）いわく、「凡そ天地の間に生まれし者、人より貴きは無し。所謂(いわゆ)る万物の霊、是(これ)なり。所以(ゆえん)なる者は何ぞ。五常の性を具へ、而して天地に参ずればなり」(「警述」)。

西洋では「人間は万物の尺度である」(プロタゴラス)が、これにあたる。プラトンも自然＝物を否定的に捉え、不滅の「霊魂」を持つ人間を重視した。弟子のアリストテレスもまた然り。世界を神―人間―動物―植物―無機物の等級により構成されるとし、人間は神を除けばこの世の頂点に立つ存在だとした。

この誇りを推進力に我々は、かつての「原野」に代わって「未来」という混沌を開拓すべく懸命に努力し続けた。そして、知の力により未開の地を幸福の世に変え、技術革命・情報革命をなし、遺伝子操作までやり遂げてしまった。だが、素朴な予感として天与の恵みはもうあまり残っていないのではないか。この先に本当に好ましい未来は待っているのだろうか。じつはこの種の問題はとうの昔に気づかれていた。『列子』にいわく、

> 太古の神聖の人、備(つぶ)さに万物の情態を知り、悉く異類の音声（言葉）を解す。会して之を聚(あつ)め、訓(おし)へて之を受けいれ、人民に同じうす。…血気の類（生き物）は、心智殊に遠からずと言ふなり。（黄帝篇）
>
> 黄帝乃ち喟(き)然として讃(たん)じて曰はく、朕の過(あやま)ちや淫(ふか)し。一己を養ふに、其の患(うれい)此くの如し。万物を治むるに、其の患此くの如し。(同)

これはオレの間違いだったと嘆く黄帝。人類は再び万物の「音声を解する」ことができるのか。限りなく困難ではあるが、一筋の手がかりがタゴールの言葉の中に見出し得る。1916年に日本を訪問し、俳句に魅せられて作った短詩風詩集「迷える小鳥」(『タゴール著作集』第一巻　第三文明社1981）から。

> 木々は大地のあこがれのように、天をのぞこうとして爪立つ。
>
> 神は大きな王国には飽きる、だが小さな花には決して飽きない。
>
> 大地は草の助けによって愛想のいいものになる。
>
> この木のさ揺れする葉は、みどり子の指のように私の心にふれる。
>
> どの赤ん坊も、神はまだ人間に絶望していないというメッセージをたずさえてくる。

この柔和な生命観にかすかな希望を繋ぎたい。秩序と規律に従属せしめられた自然は、もはや人間にありのままを語ることはしない。しかし、そこを突き抜けた例が我々の周辺にもないではない。道風・行成とともに三跡の一人・藤原佐理の「暮春」詩。

> 花の唇よ　何も言わないけれど　それは天地の恵みを得ての美　花唇不語偸恩得
>
> 春の水をはさんで　紅桜　互いの輝きでそっと身を包みあう　隔水紅桜光暗親
>
> 向き合いながら舞う　花吹雪　波間に浮かび芳しく　両岸芳菲浮波上
>
> 空を流れ行くのは　鶯　一日中　春の残りを告げ廻る　流鶯尽日報残春

秋の詩からも一首、頼杏平の「江都客裡雑詩」。

> ここはお江戸　八百八町の月明かり　八百八街宵月明
>
> 秋の気配の風のもと　聞こえ来る虫売の声　秋風処処売虫声
>
> 籠の中のいい音色　偉い方々にゃ分かりゃせぬ　貴人不解籠間語
>
> 西のはずれの露しげき　まっことひなびた　この風情　総是西郊風露情

「小さな王国か隠れ里」のような日本の漢詩。幸い、まだ深い森の中に眠っている。神様もまだ自身の創作を見捨ててはおられないと思いたい。黄帝が朕の責任だと落胆しない世を、神様が人間に絶望しないうちに引き寄せなければならない。未来に希望の種を届け、命の環をつないでいかなければならない。

随想　キリマンジャロの雪

国際政治経済学部　国際政治経済学科　特別任用准教授　髙橋美智子

「キリマンジャロは、高さ19,710フィートの、雪に覆われた山で、アフリカ大陸の最高峰といわれている。両側の頂はマサイ語で"Ngaje,Ngai"（神の家）と呼ばれている。この西側の頂上近く、ひからびて凍りついた一頭の豹の死体が横たわっている。こんな高いところまで豹が何を求めてやってきたのか、誰も説明したものはいない。」

私がこのヘミングウェイの「キリマンジャロの雪」を読んだのは、高1の時だったと思う。なぜか、この冒頭の豹の話が頭にこびりついて離れなかった。いつかこの豹をみつけたい。そんな思いを心の片隅におきながら、夢多き青春時代をすごした。そして大学卒業後に、青年海外協力隊員として、アフリカに派遣されることになり、キリマンジャロ登山のチャンスをつかんだのである。それでは、これから若き日の冒険の記憶をたどってみよう。

日本と異なる気候・風土・文化をもつアフリカでの生活は、毎日が刺激的で充実していた。あっという間に2年間の任期のうち、1年半が経過した。その最後のクリスマス休暇にキリマンジャロに登ることを決意して、私は一人、タンザニアへ飛んだ。

1日目：標高1500mのマラングで一泊し、翌日キリマンジャロ国立公園のゲートをくぐった。そこで、ヤッケから靴まで、登山用具一式を借り、食料（米、缶詰、果物、チーズ、パン）などをマーケットで調達し、荷物を担いでくれるチャガ族のポーターと、ガイドをお願いした。「コンニチハ」と挨拶されてちょっと驚いた。日本人の登山者がけっこう多いらしい。さあ、いよいよ3泊4日のキリマンジャロ登山に出発！　標高2000mくらいまでは森林地帯が続く。植物はすべて大型で、自分が小さくなったような感じがした。森林をぬけると、今度は雄大な大草原が広がる。山の裾野は30kmくらいで、傾斜はとても緩やかである。およそ3時間半で、第1ハットのマンダラに着いた。夕食は、ポーターが小屋で提供してくれる肉と野菜をかまどで調理してくれた。ビーフシチューのようなものだったが、おなかがすいていたこともあり、とてもおいしかった。満腹で外に出て夜空を見上げれば、そこには豪華な満天の星が輝いていた。

2日目：起床すると、霧が出ていた。朝食後、すぐ出発。小雨の中、坦々とした道を5時間くらい歩き、第2ハットのホロンボに到着。疲れはほとんど感じなかった。昼食はトリのモモと、ポテト。上に来るほど、食事は粗末になっていった。

3日目：午前9時に出発。また、だらだらと起伏のない草原を歩き続け、2時ころ、最終ハットである標高5000mのキボに着いた。遠くに、待ちに待った白いキリマンジャロ山頂が見えた。少し体がだるくなっているようだった。山小屋でフィンランド人の家族と一緒になり、登頂のことで話がはずんだ。その後仮眠をとり、夕食時に起こされる。食欲はまったくなかったが、何も食べないと、体力が持たないと思い、チーズと固いパンをかじった。少し吐き気を感じたが、また、寝てしまった。

4日目：真夜中、午前零時に起こされる。フィンランド人の家族は先発したようだ。顔を洗い、トイレを済ませて出発。真っ暗で寒い。火山灰を踏み固めたジグザグコースをゆっくりと登る。今までと打って変わって急斜面だ。途中で、フィンランド人の家族に追いついた。まだ、お互いに励ましあう余裕があった。次第に風が強くなり、雪も混じってきた。先を行くガイドのコートの裾がパタパタはためくのだけがみえた。3時間ほど歩くと、休憩が30分おきくらいになった。呼吸が苦しい。風を避けるため、岩陰で小休止。タバコをおいしそうにくゆらせているガイドには唖然とした。彼の心肺機能は一体どうなっているのだろうか。しばらく休んで、また歩き始める。やがて、人間の歩みとは思えぬくらい、ゆっくりしたペースになり、だんだん足が前に進まなくなっていった。5、6歩進んでは、止まって呼吸。それを繰り返した。酸素がうすいため、息を吸っても全く楽にならないという、生まれて初めての体験であった。胸が痛い。苦しい。気力だけで進んでいくと、ガイドが指差す頭上に、ピークがのしかかっていた。また、少し元気がわいてきた。ついに到着。やった一。雪の上に膝をつき、ガイドと固い握手を交わした。記念写真を撮ってもらってから、冷たい風の中で目を閉じていると、急にまぶたの向こうが明るくなるのを感じた。目をあけると、赤紫に染まった空、そして黒い雲間に太陽が昇ってくるのが見えた。荘厳な日の出の瞬間である。涙があふれてきた。その光の中にいつまでも佇んでいたかったが、ガイドに下山を促された。紫外線が強烈過ぎて、危険だという。「そうだ、豹は何処に?」あたりを見回したが、太陽に照らし出された雪面はまばゆくて、凍てついた豹はどこにも見えなかった。

下山の道はかなり急だったので、滑り降りるように早く下ってしまった。それがいけなかったのか、夕方、モシの宿についてから、猛烈な頭痛に襲われた。フロントにいた、ギリシャ人の銀髪のおばあさんにキリマンジャロ登頂証明書を見てもらってから、部屋のベッドにたおれこんだ。凍てついた豹の姿を追いながら、私は、深い眠りに落ちていった。

心に届ける支援物資

文学部　中国文学科　専任講師　張佩茹

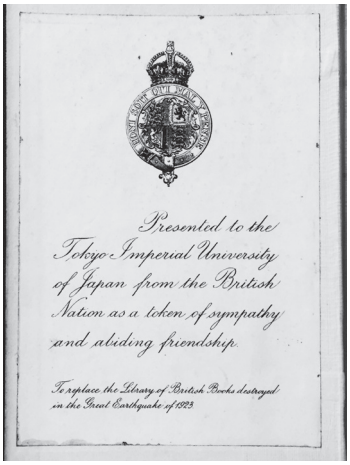
最近、箱根山の噴火警戒レベルの引き上げや口永良部島での噴火がニュースとなり、さらに地震緊急速報が出たほどの大きな地震が二度ほどあったため、日本列島における自然災害のさらなる発生が危惧されているところです。自然災害として、4年前の3月に起きた東日本大震災はまだ人々の記憶に新しいものですが、1923年9月の関東大震災は大多数の人にとって、実体験を伴わない歴史となっているでしょう。しかし、ある一冊の本との出会いが、私を92年前に起きたこの大震災に結びつけてくれました。

その本とは、デンマーク人の言語学者オットー・イェスペルセン（Otto Jespersen，1860年～1943年）が著した原稿をもとに英訳されたHow to Teach a Foreign Languageという本です。この本は初版が1904年に世に出され、その後しばらくの間4、5年おきに再版を重ねていた、ということを考えると、当時においては影響力のあった本だと思われます。この本を初めて目にしたのは、博士課程に入学して間もない頃だったと記憶しています。そのとき、私はイェスペルセンが彼自身にとっては外国語である英語を研究対象としながらも、その研究成果がイギリスやアメリカでも高く評価された、ということに興味を感じました。文学部の図書室で彼の著書を探しているうちに、このハードカバーの本のタイトルに惹かれて手に取りました。言語学の大家であるイェスペルセン氏が外国語教育についてどのような考えを持っていたのかが知りたかったためです。そのハードカバーを開いたときに、内側に一枚の紙が貼ってあることに気付きました（写真参照）。その内容を和訳すると、おおよその意味は「震災へのお悔やみおよび永遠の友情のしるしとして、英国から日本の東京帝国大学に寄贈されたもの」になるでしょう。また、その下に小さな文字で「1923年の大震災に失われた英国の書籍と置き換えるために」と書かれています。当時のことを東京大学附属図書館の年表で確認すると、1923年9月には「関東大震災、附属図書館炎上全壊、蔵書喪失、国際連盟で復興援助の決議」と書いてあります。ということは、偶然に手にしたこの本は、関東大震災の後にイギリスで日本への寄贈書籍として選ばれたものです。この本が選定されたあと、どのように貨物船に積まれ、またどのように遠路遥々の旅を経て日本まで届けられたのか、ということを想像すると、感動を覚えずにはいられませんでした。

震災の支援物資というと、一般的に食料品や飲料水、生活用品などがすぐ想起されますが、このような教育のための支援物資もなくてはならないものです。近年、書籍については、デジタル化が進み、データとして保存しておけば、災害が起きた場合にも復元しやすいです。しかしながら、印刷物と比べて、デジタルのものにはどうしても温もり感が欠けてしまいます。個人的には、これら両方が共存することを願っています。

さて、この本の内容について簡単に紹介すると、イェスペルセン氏が当時のデンマークにおける外国語教育のあり方に疑問を感じ、新しい教授法を提唱するためにこの本を執筆したわけですが、デンマーク語の原著が出版された1901年から百年以上経った今でも読む価値を感じさせる一冊です。まず、氏は外国語を学習する目的を「意見交換するため」だと定め、その目標を達成するためには、文法中心の練習や翻訳に比重を置かれた教授法は望ましくないと明言しました。なぜなら、文法のルールを中心に編纂された教材では、用例が「文法の練習のため」のものになってしまい、それらの用例の間は往々にして意味の関連性が薄く、その結果、学習者は断片的な言語知識しか獲得しないからです。また、学習者の理解度を確認するためによく用いられる「外国語の内容を母国語に翻訳する」という教え方については、学習者が上手に翻訳できても原文を思い出せないことが多いため、これが有効な教授法とは言えないとイェスペルセン氏が説明しました。それでは、理想的な外国語教育はどうすれば実現できるかというと、教師が可能な限り、初期段階よりその外国語で授業を進め、学習者にその言語の自然な発音やイントネーションに慣れさせることです。つまり、完全イマージョンに近い方法です。この本では、氏は抽象的な理論ではなく、授業の手順や教える際の注意点などを分かりやすく書いていますので、外国語教育に携わっている者にとって、共感できる内容が多いです。

今回、この原稿を執筆するために、久しぶりにもう一度この本を手にしましたが、読んでいるうちにイェスペルセン氏の洞察力の鋭さに改めて感銘を覚えました。この本に出会ったことに感謝しています。



教えて、漱石先生 「柏の図書を借りたいの巻」

学生：先生～、課題の図書が柏図書館にしかないんですけど、どうやって取寄せればいいんですか？

先生：カウンターに依頼するか、マイライブラリを使えば自分で申し込めるんじゃよ。

学生：実は…、マイライブラリって、まだ使ったことないんですよ～（-_-;）

先生：図書館HPから図１のようにするんじゃ。

学生：へぇ～、自分で申し込むなら学校以外からでもできますね。

先生：そうじゃ。ただし、雑誌や参考図書などの貸出禁止の本はマイライブラリからは申し込めんから、カウンターに申し込むんじゃ。

学生：なぁんだ、やってみたら、以外と簡単ですね。ところで、先生の論文を読んでみたいんですが、どうしたらいいんですか？

先生：まずは、論文が何に掲載されているかOPACで調べてみることじゃ。九段にあれば自分でコピーせいっ。柏にあったからといって、すぐに依頼したらダメじゃぞ。

図書館HPの左に「情報検索」とあって、そこに、「オンラインデータベース/電子ジャーナル」とか「リンク集」とあるじゃろ。（図2）

図１

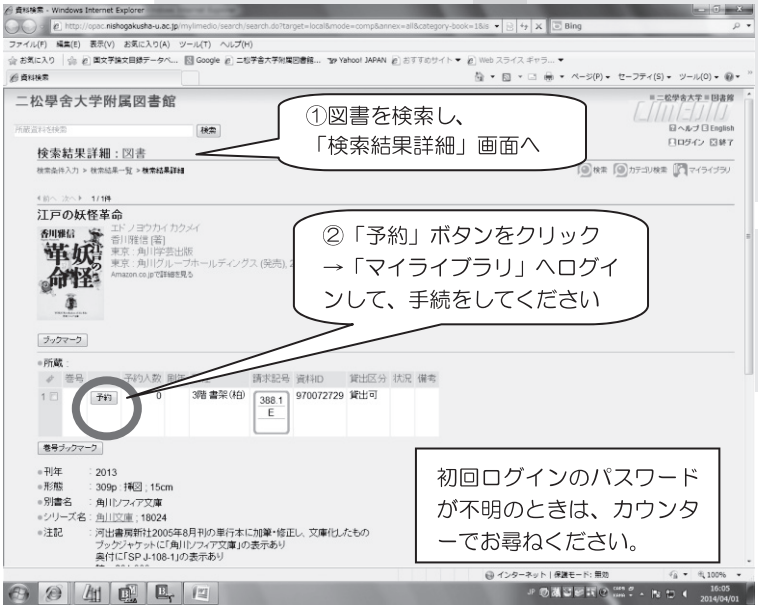
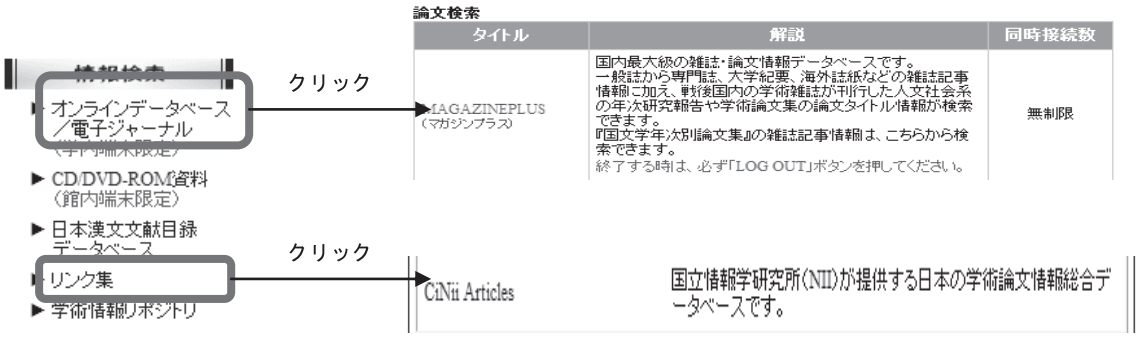


図２



そこをクリックすると、「CiNii Articles」や「マガジンプラス」に接続できて、図3のように機関リポジトリやオープンアクセスと表示されているものは、論文がネットで無料で見れたりするんじゃ。

図３

学生：なるほどぉ!ネットで見られれば、自分でパソコンからプリントアウトできますね！！

先生：ホッホッホ。これでレポートが楽しみじゃのぉ～。

学生：ひぇ～（泣）これから図書館に行ってきまーーす。

ラーニング・コモンズ開室

本年４月７日、九段２号館１階・２階に、本学の学生および教職員が利用できる、次世代型の学習施設「ラーニング・コモンズ」がオープンしました。

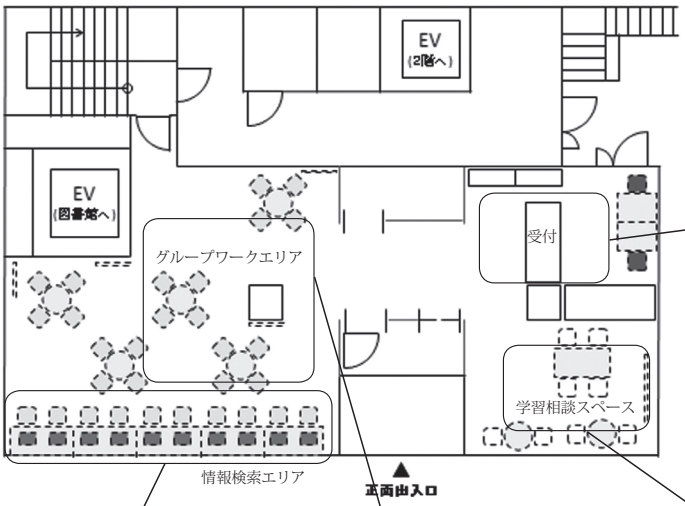
この施設は、「複数の学生が集まって、様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく自発的な学習スタイルを可能にする『場』として整備されたもの」で、活発に議論ができるグループワークエリアや、豊富なPC機器を利用した情報検索エリア、多面プロジェクターや電子黒板等が整備されたプレゼンテーションルームなどが配置されています。

更に、１階は図書館とも行き来が可能となっており、図書館の拡張エリアとしても利用できます。なお、１階正面出入口からの入館には学生証・教員証が必要です。

では、どんな施設か見てみましょう。

◇１階

１階には受付、学習スペース（グループワークエリア、情報検索エリア）、学習相談スペースがあります。学習スペースには６台のホワイトボード、自習用ノートPCが10台あります。



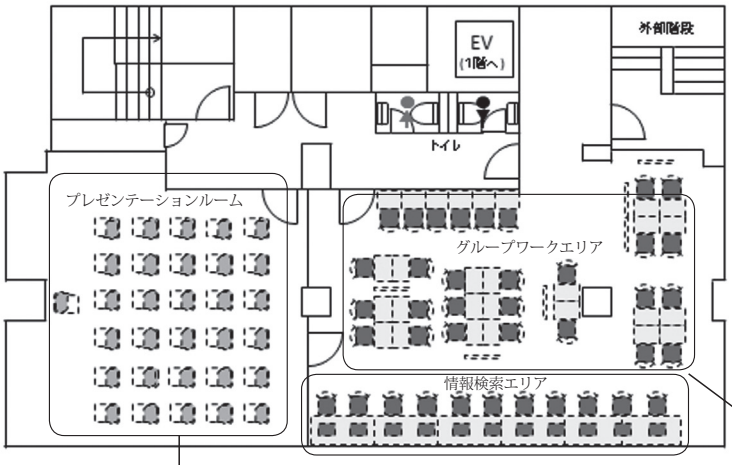
プレゼンテーションルームの利用申請受付や、ノートPC・PC用マウスセット・ホワイトボード用マーカーセットの貸出などを行っています。ラーニング・コモンズについてご不明な点があれば、こちらへお尋ねください。

貸出ノートPCやホワイトボードを使って協同で課題に取り組んだり、ディスカッションの場として利用ができます。授業時間外学習に使ってみましょう。自習用ノートPCもあります。

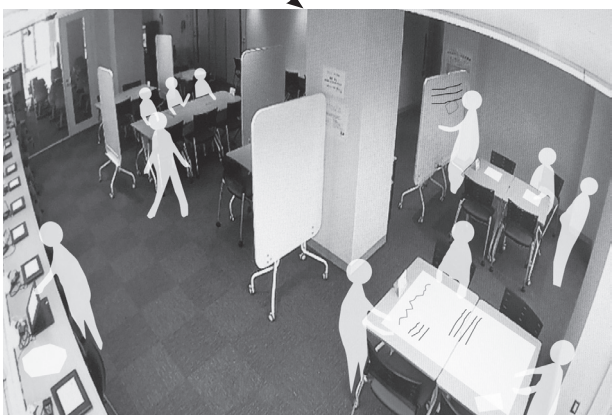
現在は、学習スペースとして使用しています。将来的には、アドバイザーを配置し、学習相談スペースとして使用します。

◇２階

2階には、1階と同様グループワークエリア、情報検索エリアがあり、ホワイトボード6台と自習用ノートPCが11台あります。このほかにプレゼンテーションルームがあり、ゼミやサークルのプレゼン活動、模擬授業の場として活用できます。ここには、3面のプロジェクターや電子黒板、講義記録システムやクリッカーシステム（理解度把握システム）があります。



２階にもグループワークエリアなどの学習スペースがあります。１階よりも眺めが良く、学習がはかどるかも……。



プレゼンテーションルームでは、電子機器を活用した多様な発表が行えます。使用する際には、１階の受付へ申請をしてください。５人以上の団体で、プレゼンテーションを目的とした利用を受け付けています。利用日の１か月前から予約申請が可能です。

★１階、２階とも机やホワイトボードの移動は自由です。使用後は元の位置に戻してください。

いかがですか？
多くの可能性を秘めたラーニング・コモンズ、
是非実際に利用してみてください！！

図書館だより

図書館カレンダー　開館日・開館時間は変更することがあります。詳しくは図書館ホームページをご覧ください。

九段	7月		柏
8：40～21：50	1	水	9：15～17：00
8：40～21：50	2	木	9：15～17：00
8：40～21：50	3	金	9：15～17：00
9：00～16：50	4	土	9：15～16：30
閉館	5	日	閉館
8：40～21：50	6	月	9：15～17：00
8：40～21：50	7	火	9：15～17：00
8：40～21：50	8	水	9：15～17：00
8：40～21：50	9	木	9：15～17：00
8：40～21：50	10	金	9：15～17：00
9：00～16：50	11	土	9：15～16：30
閉館	12	日	閉館
8：40～21：50	13	月	9：15～17：00
8：40～21：50	14	火	9：15～17：00
8：40～21：50	15	水	9：15～17：00
8：40～21：50	16	木	9：15～17：00
8：40～21：50	17	金	9：15～17：00
9：00～16：50	18	土	9：15～16：30
閉館	19	日	閉館
8：40～21：50	20	月	閉館
8：40～21：50	21	火	9：15～17：00
8：40～21：50	22	水	9：15～17：00
8：40～21：50	23	木	9：15～17：00
8：40～21：50	24	金	9：15～17：00
9：00～16：50	25	土	9：15～16：30
閉館	26	日	閉館
8：40～21：50	27	月	9：15～17：00
8：40～21：50	28	火	9：15～17：00
8：40～21：50	29	水	9：15～17：00
8：40～21：50	30	木	9：15～17：00
8：40～21：50	31	金	9：15～17：00

7/20(月）は授業開講のため開館（九段）

九段	8月		柏
閉館	1	土	閉館
閉館	2	日	閉館
9：00～16：50	3	月	9：15～16：30
9：00～16：50	4	火	9：15～16：30
9：00～16：50	5	水	9：15～16：30
9：00～16：50	6	木	9：15～16：30
9：00～16：50	7	金	9：15～16：30
閉館	8	土	閉館
閉館	9	日	閉館
9：00～16：50	10	月	9：15～16：30
9：00～16：50	11	火	9：15～16：30
9：00～16：50	12	水	9：15～16：30
閉館	13	木	閉館
閉館	14	金	閉館
閉館	15	土	閉館
閉館	16	日	閉館
閉館	17	月	閉館
閉館	18	火	閉館
閉館	19	水	閉館
9：00～19：00	20	木	9：15～16：30
9：00～19：00	21	金	9：15～16：30
閉館	22	土	閉館
閉館	23	日	閉館
9：00～19：00	24	月	9：15～16：30
9：00～19：00	25	火	9：15～16：30
9：00～19：00	26	水	9：15～16：30
9：00～19：00	27	木	9：15～16：30
9：00～19：00	28	金	9：15～16：30
閉館	29	土	閉館
閉館	30	日	閉館
9：00～19：00	31	月	9：15～16：30

8/20（木）～31（月）の平日はレイトデー（九段）

大学資料展示室より

5/18（月）より、大学資料展示室では、企画展「三島中洲と近代　其三」を開催しました。
今回は、「創立者三島中洲とその後継者たち」をテーマとし、中洲に学んだ人々を取り上げました。
また5/30（土）にはこの企画展に合わせた講演会が開催され、多くの方が企画展へも足を運んでくださいました。
常設展も行っておりますので、お近くへお越しの際はお立ち寄りください。

編集後記

ラーニング・コモンズの完成に際し、その一部をご覧いただきました。この施設の内容がますます充実し、より多くの学生のアクティブラーニングに活用されることを期待します。

そして、今回も3名の先生にご寄稿をいただきました。深謝いたします。（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第92号
発行日　平成27（2015）年7月1日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒277-8585　千葉県柏市大井2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333